

① 疑問と戸惑いからのスタート

本研修を担当することになった時、正直なところ、頭の中には「？」しか浮かびませんでした。「特定課題探究とは何か?」「生徒支援とは何か?」といった根本的な疑問が次々と湧き上がり、どこから手を付ければよいのかさえ分からない状況でした。

そこで、運営チームとしてまず取り組んだのは、『生徒支援』とは何だと思えますか?と、機構内の様々な方に意見を求めることでした。すると、「生徒一人ひとりの個性を伸ばすこと」や「問題行動への対応を重視する」といった、聞く人によって異なる視点があることが見えてきました。これらの対話を通じて、「生徒支援」という言葉が持つ多様な解釈に気づきました。

そして、チームで改めて議論を重ねた結果、「生徒支援とは何なのか」という問いを、参加者自身にも一緒に考え語り合ってもらおう研修にしよう、という方向性が生まれました。こうして、担当者と参加者が共に問いを深めていく研修の形が、少しずつ形作られていきました。

② 準備における葛藤

研修準備の段階で、最も苦勞したのは、資料や文献を探すことでした。他者の考えや文献に触れることで、自分だけでは得られない新たな視座を持つことは、研修において重要だと考えています。しかし、自分自身が「生徒支援とは何なのか」という問いに迷いを抱えていたこともあり、適切な資料を見つけるのに非常に苦勞しました。

例えば、教育心理学や学校組織論、さらには福祉に関する文献など幅広く調べましたが、「これだ」という確信を持つことはできませんでした。「参加者にどのような視点を提供するか」「自分の選んだ資料が役立つのか」という不安ばかりが募り、悩む日々が続きました。

最終的に提示した資料がどの程度参加者の学びに役立ったのかは、今でも自信がありません。しかし、その悩み自体が、自分自身の一つの学びになったとも感じています。

③ インターバル型研修での発見

本研修はインターバル型研修という形式で実施しました。複数回の研修を一定期間の間隔を置いて行うことで、参加者がその間に試行錯誤を繰り返し、日々の実践を深めていく仕組みです。この形式の大きな意義の一つとして私が感じたのは、「研修と研修の間でも、参加者や担当者が試行錯誤を共有し合える」という点でした。

共有の場として Classroom を活用し、私自身の経験や気づきを投稿しました。それに対して参加者がコメントを返してくれることで、自分だけでは考えつかなかった視点に気づかされることが多々ありました。また、自由参加のオンラインミーティングでは、参加者が実践における悩みや葛藤を語り合う姿が印象的でした。

研修は限られた時間の中で実施されるものですが、インターバル期間を通じて、その時間が豊かに膨らみ、参加者同士の関係性や学びが深まっていくのを実感しました。このプロセスに、研修の新たな可能性を感じました。

④ 思いを共有し、認め合う時間の価値

運営チームとして試行錯誤を重ね、一先ず形になった生徒支援探究研修ですが、まだまだ改善の余地があると感じています。それでも、参加者の皆さんの研修当日の様子を見て気づいたのは、日々の悩みや実践を共有し、それを互いに認め合う時間が、いかに大切かということです。

たとえば、ある参加者が「自分の支援が本当に生徒のためになっているのか不安だった」と語った際に、他の参加者が「その取り組みは生徒をしっかり支えていますよ」と共感し、実践を肯定する場面がありました。そのような共有の時間が、参加者にとっても担当者にとっても大きな意義を持つのだと感じました。

自分の悩みを語り、誰かに共感されることで得られる安心感。それは、研修を運営する私自身にとっても大きな学びとなりました。研修を通じて感じた「思いを共有することの価値」を、今後もさらに深めていきたいと思っています。